

翻  
訳

## Charlotte M. Brane 著 『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』(翻訳・その17)

堀 啓子

これまで『東海大学紀要 文学部』に連載してきた本稿は、『東海大学紀要 文化社会学部』に稿を移し、引き続き、『ドラ・ソーン(Dora Thorne)』の翻訳を掲げる。原著は長編物語であるため、分載十七回目となるこのたびは、第二十二章の訳を掲げることにする。猶、原著も引き続き Dodo Press の二〇一〇年リプリント版に拠るものとした。

\*本稿は、科学研究費補助金【基盤研究(C)】「課題番号:18K00329」による研究成果の一部である。

## 二十二章

帰館したその夕べは、アール卿の人生で最も幸福な一夜となった。彼は美しい娘たちに魅了された。ヘレナ夫人は微笑みながら、彼らの関係はなかなかわからないものだろうと考えていた。彼女の息子は悲しげですっかりやつれてはいたが、この二人の若い娘たちの父親というよりは兄のように見えた。

彼らは最初、少し緊張していた。アール卿は何を話したらいいのか、とまどっているようだった。ヘレナ夫人は優雅な助け舟を出した。彼女は大きなダイニングルームの代わりに、暖炉の火が赤々と燃えてランプが柔らかな光の洪水をつくる、心地のよい朝の間に夕食の準備をさせた。それはまさに暖かく居心地の良いイギリスの快適な空間そのもので、アール卿は嬉しそうに見えた。

夕食を終えると、彼女はベアトリスに歌を歌うように勧め、父に腕前を披露できることに有頂天になったこの孫娘はその言葉に従った。その澄んで響く際立った美声は父を感激させた。彼女は感情豊かに、そして魂に深く根差した情熱を込めて何曲も歌いあげた。

それから、ヘレナ夫人はリリアンに、彼女のスケッチを綴じたフォルオオを持つてこさせ、アール卿は再び、思いもよらなかつたその技術と才能に驚き、喜んだ。彼はそれらの画を絶賛した。一枚の絵が特に彼の注意を惹き付けた。それはかなり以前にリリアンが描いた美しい情景で、遠くの白い帆船に陽光が降り注いでいる、ナッツフォードの広く美しい海のスケッチだった。

「すばらしい画だ」と彼は言った。「飾ったほうがいい。フォリオに隠しておくのは惜しい。リリアン、きみはみごとに色彩をものしている。太陽が水面にきらめいている様子さえもわかる。この海はどこから眺めたものだろう?」

「ご存じないのですか?」と驚きの眼差しで父を見つめながら彼女は言った。「ナッツフォードから——お母様の家からですわ。」

ロナルドは突然の、痛みを伴った驚きを以て視線を上げた。

「お母様の家!」この言葉は突風のように彼を襲った。彼は、ドラの罪——あの冷たい手紙、急な逃避、二度と彼女は家に入れないと誓った自分自身の決意——そうした一連の過去を思い出した。だが子どもたちが母親を愛していたに違いないこと——彼女は娘たちにとつては人生の一部だったことには思いが及んでいなかった。そうして、今度は彼の眼前には「お母様の家」という美しい画が置かれた。

「これは」とリリアンが言った。「エルムスです。この大きな古い樹を見てください、お父様!これがお母様の部屋の窓で、こちらが私たちの勉強部屋でした。」

彼は驚きを以て眺めた。それでは、これがドラの家だったのだ——緑の牧場の真中に建てられた、この綺麗な古風な農家が。この家

で十五年の間を過ごしていたドラがどんな風に変ったのか、彼は半ば想像しながらその絵を眺めた。あの黒い巻き毛は、以前と同じように優美な房をつくっているのだろうか?紅潮したえくぼの顔は、青白い頑固な表情に変わってしまったのだろうか?そして、すべての柔らかな思い出を振り払い、あの忌むべき庭での情景が思い起こされた。ああ、いや、決して彼は許し得ない——この、彼女の娘たちに対してさえ、彼はその母親のことを口にするにはできなかつた。彼は二枚の画を脇に置き、額に飾ろうと再び言うことはなかつた。

娘たちが退室した後、二人はともに魅力的だとアール卿は心の中で思った。だが、自覚はしなかつたものの、より好ましい娘がいるとすれば、それは輝くような美しいベアトリスだった。彼女以上の少女に出会ったことはなかつた。ヘレナ夫人が彼を一人にすると、ずっと昔にその父親が彼の前でしていたのと同じように、彼は暖炉の側に腰掛けて夢見ていた。

致命的な過ちを犯してしまった人生を挽回するには遅すぎはしない、と彼は考えていた。彼は直ぐに取りかかった。まずは、所有する土地に意識を向けた。彼は全ての模範とならねばならなかつた。社会活動にも興味を示した。彼の、無為に費やされた愚かな青春時代を憐れんでいた人々も、彼の人格を温かな賞賛を以て語ることになつた。そして何よりも彼は娘たち、とりわけベアトリスにもたらされるはずのすばらしい未来を夢見た。あの美しさと優美さ、すばらしい美声、率直な恐れを知らぬ精神、気の利いた愛嬌のあるウィ

ットを持ち合わせた彼女は、社交界の女王になれるはずだった。娘は、彼の若いときの過ちを埋め合わせてくれると思われた。ベアトリスは恵まれた結婚をするだろう。彼女は、彼が辱めた、由緒正しい歴史のあるこの家系に新たな栄誉をもたらしてくれるだろう。いつか、この家系の歴史が彼の過つた結婚について記す時には、ベアトリスに釣り合う立派な配偶者の家系によって、充分に贖われるだろう。

彼は彼女を中心に思いを巡らせていた。くすぶっている残り火を座って眺めていると、もう会うことは適わない父に向って彼自身が生じたのと同じことを、もしベアトリスが彼に対してでかしたなら、という思いが浮かんだ。ああ！もし彼の娘が彼に似て、彼の希望を打ち砕き、彼が思い描いている空想の城を打ち壊したなら――価値のないふさわしくない人間を愛し、彼をだまして失望させたなら！だが、いや、そんなことはあってはならない――彼女を見張ってしよう。アール卿はこの考えに身震いした。

翌朝、朝食のとき、ヘレナ夫人はその日の彼の予定を尋ね――娘たちをホルト家まで送るつもりがあるかどうか尋ねた。

「いいえ」とアール卿は応じた。「娘たちといろいろ話をしてみたいと思います。午前中はそれで終わるでしょう。昼食後にホルトを訪ねることにします。」

ロナルドは、アール卿として、決心した。彼の父が彼に警告を与

え、最も強い印象を彼に与えたその同じ場所で、同じやり方で彼は子供たちに注意を促すことにした。そうして彼は、自分が父親と最後に一緒に歩いた館の肖像画のギャラリーに娘たちを伴って行った。

優しいが断固たる口調で彼はこう言った。「きみたちをここに連れて来たのは、話しておかねばならないことがあり、ここがその話に最適の場所だからだ。いいかい、何年も前のことだが、私がきみたちをここに連れてきたように、私の父も私をここに伴い、私がきみたちに注意し、助言するのと同じことをした。私ときみたちは、血は繋がっているが、他人も同然だ。私はきみたちを愛していくつもりだし、現に愛してもいる。きみたちの幸せを最大限に考えていくつもりだ。だが私が大切に考えていることがひとつあり、それは隠しごとを一切しないこと、そして私が禁じたいことがひとつあって、それはどんな類のどんな問題であれ嘘をつくことだ。もしきみたちのどちらかが、まだ短い人生のなかで秘密を持ったならば、今それを私に話さない。誰かを愛しているのならば、たとえそれが相応しい相手でなくても、今言ってしまうなさい。どんなに軽率で愚かで思慮を欠いた行為だとしても――嘘をつく以外のことはすべて許します。お父様を信じてくれれば、優しい女性のようにきみたちに親切に接しよう。だが嘘をつくのならば決して許しはしない。」

二人の顔はともに青ざめた――ベアトリスは驚きと強い恐怖のためで、リリアンは繊細な感受性のためだった。

「我々一族の男たちは」とアール卿は続けた。「ときに過ちを犯す

のだが、女性たちは決して過ちを犯さない。きみたちは、高貴で汚れなく優れた血統の長い歴史に名を連ねている。きみたちの生き様のうちに、先祖の女性たちより劣った、卑しいものがあるはずはない。だがもし何かそうしたものがあれば――もし、不用心や経験不足、注意を欠いたせいですうしたことがあるのなら、今話してしまいなさい。お父様は忘れることにするから。」

二人はともに何も言わなかった。すると父の声は奇妙な哀調を帯びてきた。

「お父様は人生で一度偽った行動をしたことがあった。」とアール卿は続けた。「その結果、お父様は家を追われ、人生最良の時をずつと他国でさまようことになった。何をしたのかは大した問題ではない――きみたちが知ることもないだろう。だがその結果、私は欺瞞を決して許さなくなった。私は決して大目に見ることはなく、そうしたことに不快な嫌悪を感じる。きみたちが隠しごとをせず、高貴にふるまう限り、私は誠実で最良の理解者になろう。だが娘たちよ、きみたちを愛するがゆえに、嘘偽りを私は決して許すことはしない。」

「人生で嘘をついたことなど一度もありませんわ」とリリアンが誇り高く言った。「お母様から、真実を大切にするように教わりました。」

「ベアトリス、きみはどうか？」と彼は、半ば目をそらしている美しい顔のほうを向いて尋ねた。

「妹と同じですわ。」というのが気品を感じさせるその返事だった。「私も嘘などついたことはありません。」

あのヒュー・ファナーナリーとの運命的な秘密を思い出したため、そう話している間でさえ彼女の唇は恐怖で青ざめていった。

「信じよう。」とアール卿は応じた。「きみたちの表情には真実味がある。では次に――怖がらないで――今までの生活で隠しごとはないだろうか？分かつているね、きみたちが何をしてしまったとしても、私は必ず許そう。問題や困ったことが起きたとしても、若い人には時にあることだ、私が助けよう。お父様を信じてくれれば、どんなことでもしてあげよう。」

再び、リリアンのきれいな顔が彼を見上げた。

「秘密なんてありません。」と彼女は率直に答えた。「秘密やそんな類のものも、私にはありません。私のこれまでの人生は開かれた本のようなものですわ、お父様。どのページもご自由に読んで戴くことができますわ。」

「よかった！」とアール卿は言って、そのきれいな顔を撫でるように手を置いた。

彼も後に気が付いたが、ベアトリスに対してこの質問を繰り返さ

なかったのは奇妙なことで――彼は、リリアンの答がベアトリスの返事もまとめたものだと思つたようだった。だがベアトリスの胸が恐怖に轟いていたことに、彼は気づかなかつた。

「若い女の子たちの中には、恋愛関係の秘密を持っている子がいるのは知っているが」と彼は優しく続けた。「私はきみたちを信じよう。あと一言だけ言っておこう。きみたちはもうすぐ広い世間に出ることになり、間違いなく多くの崇拜者がきみたちに近寄つて来るだろう。そして試練と誘惑の時（注）が訪れる。覚えておきなさい――秘密の恋は何よりも呪われるべき過ちであり、墮落なのだ。我が家系のある男はその呪いで、重い罰を受けた。きみたちが誰を愛し、誰に愛されようとも、すべては気高く、高貴に、日中のように公明にあるべきものだ。お父様を信じ、嘘を言わないようにしなさい。公正に判断し、道理にかなつた結婚ならば私は決して反対しないが、後ろ暗い関係ならば決して許すことはしない。」

「このルールを破つたならば、どんなに愛する娘でも」とアール卿は続けた。「その子を自分から遠ざけることでたとえ私自身の胸が張り裂けようとも、私はその子をすぐに遠くへ追いやるだろう。もはや私の娘ではない。私のことを敵しいとか、優しくないなどと思わないでほしい。私の言葉には充分の意味があるのだ。私はこんなことをきみたちに告げることは半ば恥じているが、言わねばならない。リリアン、微笑んでいるのは何故かな？」

「おかしいわ、お父様。」と彼女は応じた。「そんなに重々しくおつしやらなくても。私たちは出会つた人たちを愛さずにはいられなかつたのですもの。ベアトリス、私たちはどれくらいの人たちに出会つて来たかしら？ 農夫のレイさん、お母様が具合が悪い時にエルムスに往診に見えるシーベイの医師のグード先生、二人の牧夫、羊飼ひ――それが私たちがアールズコートに来るまでに出会つたすべての人です。今はそのリストにヘンリー・ホルト卿とボルゲーゼ公が付け加えられるかしら。お忘れですか、お父様、私たちは世間から外れたところで生きてきましたの。」

アール卿はその事実を思い出し嬉しく思つた。「きみたちはすぐに新しい世界の中心になるよ。」と彼は言つた。「だから世間に出る前に警告したほうがよいと思つたのだよ。きみたちの恋愛をコントロールしたりしない。たつた一つ私が禁止し、不快に思つて許さないことは、こそそした恋愛だけだ。それがどんなことを引き起こすのか、きみたちは知らないだろうから。」

そして彼はその後に、ベアトリスが奇妙に黙りこくり、美しく誇り高い顔を背けていることに気づいた。

「同意しがたいことだろう」とアール卿は言つた。「だから私も喜んでこの話を終わりにし――蒸し返したりはしない。だがもう一つだけ言いたいことは――きみたちの愛情をコントロールしたり、誰かを押し付けたりはしないが、心の中に一つの大きな望みがある。」

アール卿は少しの間、言葉を止めた。彼はアリシア・アール卿夫人の肖像をじつと眺めたが、その顔はベアトリスに生き写しだった。

「私には息子がいない。」と彼は続けた。「そして我が娘たち、きみたちは爵位も領地も受け継ぐことはない——ともにライオネル・ダーシーが受け継ぐのだ。もしいつかライオネルがきみたちのどちらかと結婚したいと望んだら、私の悲願は達成されるのだ。さあ、長い私の話はおしまいだ。ベルが鳴っているね、ハリー卿とローレンス夫人を訪ねる支度をしよう。」

その日はもうそのことについて考える時間はなかった。だが夜になり、一人になると、ベアトリスは彼女の人生の罪に向かい合った。

アール卿があんなにも優しく、全てを打ち明けるように話してくれたとき、彼女はほとんどそうしてしまいたい気持ちになった。今ではそうすべきだったと思えたが、もう遅すぎた。彼は彼女の娘らしい過ちを優しく戒めて許してくれたかもしれない。だが彼女がその事実を意図的に隠した今となっては、決して許して欲しくないだろう。許しの時は過ぎたのだ。秘密について語るには遅すぎた。わずかな言葉で、すべてを語ることはできたのに。アール卿は彼女を誇りに思い、大切にしてくれているのだから、秘密が露見しても良い結果にはならないだろう。

この壮麗なすばらしい館や彼女の大好きな豪華なもの、これから開けるはずの輝かしい未来、それらすべてを奪われ、エルムスに連

れ戻され、二度とそこから離れられない。ああ、嫌なこと！秘密は守り通さねば！だが、彼女はそれほど心配してはいなかった。いろいろなことが起きるはずだ。シーガル号は難破し、おそらくは、幾ばくかの愛情を自分に示したあの男性が亡くなってしまいかもしれないということ、彼女が痛みも辛さも感じることなく、考えた。

もしも戻ってきたとしても、自分のことは忘れてしまっているか、二度と見つけられないかだろう。彼女はさして苦にせず気楽に考えており——彼女にとつて有利に運ぶ可能性は大いにあると思っていた。そしてただ、アール卿には秘密を決して気取られてはならないということだけを考えていた。(以下、次号)

注1) 原文は、*trial and temptation* で、ロナルドは『新約聖書』「ヤコブの手紙」第一章第十二及び十三節「12:2 試練を耐え忍ぶ人はさいわいである。それを忍びとおしたなら、神を愛する者たちに約束されたいのちの冠を受けるであろう。13:2 だれでも誘惑に会う場合、「この誘惑は、神からきたものだ」と言ってはならない。神は悪の誘惑に陥るようなかたではなく、また自ら進んで人を誘惑することもなさない。」(『聖書』日本聖書協会 昭和五十七年)を、念頭に語ったと思われる。